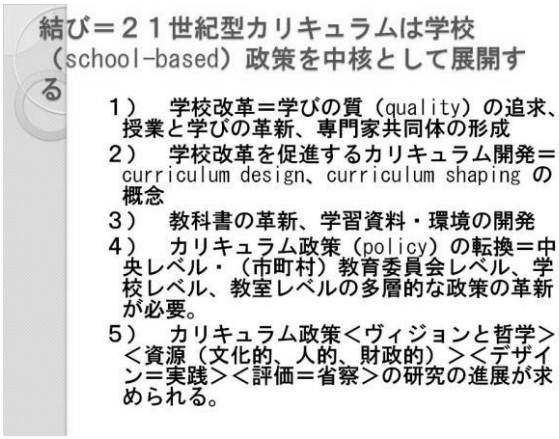

図 11

「学校改革を促進するカリキュラム」。カリキュラムはデザイン、あるいはシェイピングする(形づくる)ものです。カリキュラムコンストラクションという建築メタファーではなくて、デザインメタファー、さらには手づくりメタファー、手でつくるというイメージです。子どもと教師がそこにどうつくり上げたか、あるいは子どもとともにどうつくり上げたかというレベルの議論が重要になってきました。そうなると、やはり学校単位で考えながら、行政全体の質ということになってくると思います。

教科書は本当に日本の場合は大きな問題です。はっきり申し上げて、日本の教科書はまずもって薄い。先進のほかの国と比べて 6 分の 1 ぐらいの薄さです。だから詰め込みになってしまうのです。フィンランドの場合は、中学校の数学だけで日本の 5 倍ぐらいの教科書を 8 冊使います。生物でもその大きさの教科書を 7 冊使うのです。ですから、学習のリソースをどう豊かにするのかということは、カリキュラムの構造上、大きな問題です。

それから環境です。電子黒板等を含めて、コンピューターの環境による学習支援の環境が教室レベルでつくられる必要があります。

それからポリシーの問題で、学校単位としながら、各政策決定レベルでの役割と機能、責任をはっきりする必要があります。そうなると、カリキュラム政策は幾つか問題力を持っています。まず、ヴィジョンと哲学をめぐる問題力です。それから資源(リソース)で、ここでいう資源とは文化的リソース、人的リソース、財政的リソースです。これらのリソースをどのようにポリシーに組み込むか。それから、デザインです。どのような授業や学びの様式を想定しながら、あるいは学校の組織の在り方を構想しながら、カリキュラムの内容を決めるか。さらには、さまざまな取り組みをどのように評価し、システムとして機能させていくのか。こういう内容構成について議論にかけてもらって、全体像は多分 10 年後には、というより、今から生まれてくるのではないかというのが私の意見です。

セッションⅡ
カリキュラムの新たな構成要素
「言語力を育てるカリキュラムと授業のために」

秋田　喜代美(教育心理学コース)

ことばの教育とカリキュラム

国際学力テストでも、日常の生活の中でも、学ぶ力の根幹として言葉の力が低下しているのではないかと言われるようになってきています(図 1)。特にメディアによる情報化やグローバル化の中で、携帯電話に象徴されるように、つながりたい、しかし非常に薄い言葉、軽い言葉が氾濫している。むしろじっくりと沈黙して自分の言葉を考える時間や、そこに対する恐れも、中等教育の実際の教室の場で会う生徒たちにはあるのではないかと思うことがあります。また、頻繁にコミュニケーションを取りたいというのは、他者と違うことを意識するのではなく、内輪、仲間うちだということです。言葉を交わすことによって異質性や自分の特異性・独自性を自覚する、あるいは他者を承認する機能は弱まってきており、内輪のおしゃべり的な会話がさまざまなところでネットワークとしてできているのが現在ではないかと思います。

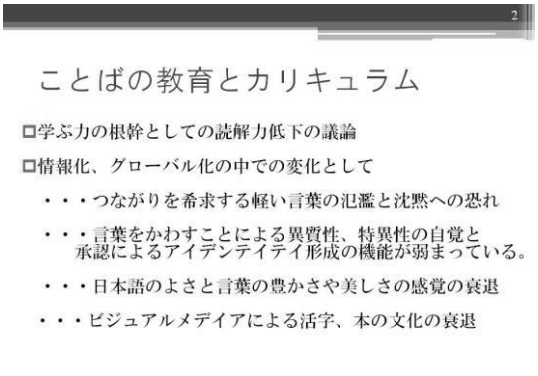

図1

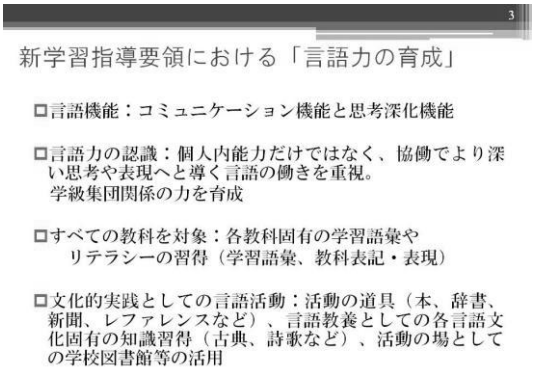

図2

そして、日本語の良さと言葉の豊かさや美しさという感覚、語彙の低下があります。私は実際に言葉の問題で読書等にもかかわっていますが、ビジュアルメディアによって本当に本が売れなくなっています。電車の中を見てもよくわかりますが、大人も携帯を見ている人の方が文庫本を読んでいる人よりもはるかに多く、本の文化の衰退という問題が背景にあるように思います。

新学習指導要領における「言語力の育成」

先ほど市川先生から、新学習指導要領における言語力の育成部会という横割りの部会ができたというお話がありました。私はそちらに入れていただき、議論をしました。ここにご参加の多くの方が既にご存じの内容だと思います。そこにいた委員によっても説明の仕方や解釈が多様だということも問題ですが、私自身が論点だと思っているのは次の4点です（図2）。

まず、言語機能として、コミュニケーション機能と同時に、思考を深めていく機能、言葉の機能を大事に教育していくこと。

二つ目は、私も強く申し上げたところですが、言語力をテストで測れる個人学力としてとらえるのではなく、協働でより深い思考や表現へと導く言葉の働きとして、学級集団の関係の力を育成することが報告書に盛り込まれています。

三つ目は、すべての教科で学習の基本となる語彙やリテラシー、各教科固有の言葉や表記・表現をきちんと習得できるようにしていくことです。

そして四つ目として、「なぜ学ぶのか」というときに、文化的な実践として言葉を考えていく。そのためには教科書やノートだけではなく、さまざまな本、辞書、新聞、レファレンスがあります。例えば小学校1年生や 2 年生でも辞書が使われている教室のようなところから、言語教養としての言語固有の知識習得、日本固有の古典や詩歌などに出合う場、活動の場としての学校図書館までの様々な言語的実践の「場」の重要性という点が挙げられています。

改訂点に対応して問われること

新学習指導要領というナショナルカリキュラムの問題で、これを実施していくときに、そしてさらに次の改訂において大事なことは、結局どの学校でも言葉の力は大事だということです。そして、それをいかに実現するかは、各学校が学校のシステムとしてどのようにつくり上げていくのか、そして先生たちがご自身でそれをどのように考えていくのかというところにあるのではないかと思います。

それを、今の改訂点の四つと対応させてみます（図3）。

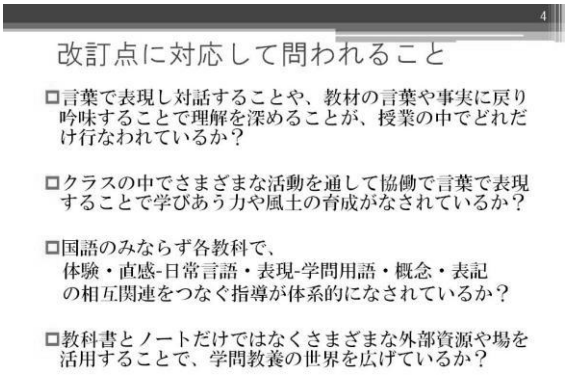

図 3

まず、具体的に言葉で表現し対話することや、教材の言葉や事実に戻り吟味するという授業が日々さまざまな教科の中でどれだけ行われているのか。

二つ目としては、クラスの中でさまざまな活動を通して、協働で、言葉で表現しあいながら学びあう風土がそれぞれの学級や学校の中にどのように培われているのか。それを吟味し、子ども、生徒の経験によるカリキュラムとして表現能力がどのように育っている内容かをとらえることが、実際のカリキュラムの問題として重要ではないかと思います。

三つ目として、それは決して国語だけの問題ではなく各教科で行われるということです。体験と言語が今回のポイント概念の一つです。単に体験するだけの教室ではなく、学習行為だけを言語で定義して説明する教室でもなく、体験・直感と、日常の生徒の中からわき出てくる教材と出合ったときの言葉や表現、さらに学問の用語や概念とのつながりをいかに理解し、体系的に説明されているのかが重要なところだと思います。

四つ目に、教科書とノートだけではなく、さまざまな外部資源や場を活用することで、生徒自身が先生の持っている世界だけではなく、さらに広がりのある学問教養の世界を広げているか。実は今回の要領でも、学校レベル・教室レベルのカリキュラムの問題として問われていると思います。

私が言葉の問題を言うと、「もっと教科内容が大事ではないですか」と言われますが、よく申し上げるのは、日本人はご飯をよく食べます。日々のご飯をいかにうまく炊くか。それは、毎日食べるものだからこそ良質にしたいわけですが、フランス料理、中華料理、いろいろな料理があっていいのです。その中でも、それをどのように料理するかという議論も必要です。しかし、ある校長が、「今、環境教育や法教育、経済教育、心理学教育など、それらをみんな中高生からやったらいいと、いろいろな学者が言っているけれど、その通達や情報だけで 100 種類ぐらいあり、さらにまた○○教育が増えるのか」とおっしゃっていました。われわれは、本当に骨になるものが何であるのかを吟味して、洗練されたカリキュラムを作っていくことが重要だと思います。その一つとして、言葉の問題を抜くことはできないと考えています。

言語力が育つ場での課題

実際に、学力の低い子は「どうやって勉強したらいいのかわからない。学習の方法がわからない」という言葉の問題が出てくるのです（図 4）。ですから、反復の単純な学習以外に、言葉の学習の方法がわからない、何のために学ぶのかわからない。

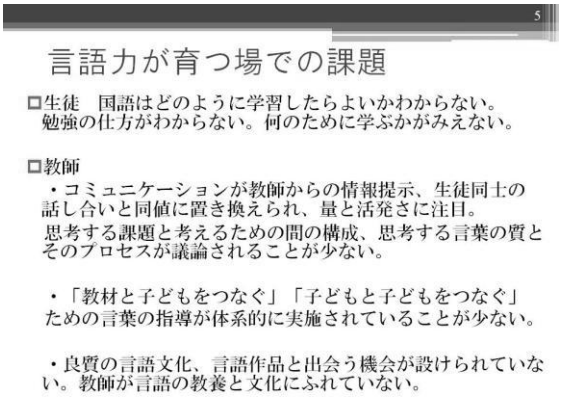

図 4

先生側の課題としては、コミュニケーションが先生からの情報提示と、生徒同士の話し合いが同値に置き換えられ、量と活発さに注目されていないか。

実は考えて「もうちょっと」というときに、先生が大概「次に行くよ」と、生徒が考え始めたときに進むのですね。でも、実はその考える間や、思考する言葉の質とそのプロセスの吟味こそが、カリキュラムの問題を質の問題に変えていきます。また、「教材と子どもをつなぐ」「子どもと子どもをつなぐ」ための言葉の指導が体系的に実施されているという意識が少ないのではないか。そして、良質の言語文化、言語作品と出合う機会が設けられていない。実は、朝日新聞に9月に出ると思いますが、「どくしょ甲子園」を立ち上げました。一人で読むのではなく、4～5 人のグループで本を活用しながら読みあいをしていきます。その作品がたくさん私のところに届いて、読ませてもらいました。その高校生の選ぶ本の質が、宮沢賢治が悪いのではないのですが、小学校・中学校で読んだ作品が多いなど、高次の質の作品が極めて少ないのです。それは実は、教師が言葉の教養と文化に触れておらず、子どもたちが、より高次の書物に開かれていないという課題があるのではないかと思います。

それは学校で先生方のところにうかがっても、言葉のカリキュラムは言葉を議論しない限り豊かにはならないのですが、授業研究や校内研修では一般的方法論や教材の話が多くて、授業中の具体的な言葉に触れて議論できるという専門的力量が必ずしも十分とは言えません（図 5）。ハーバードのプロジェクト・ゼロで教師教育の人たちとメールなどでコンタクトしていると、今、see、think、wonder というものをきっちり分けながら考えています。大体 think で何となく私はこう考える、wonder でこのように変えたらいいのではないですかとだけ言っている人たちは、実は言葉の問題、言葉の事実の see が見えていないのです。see、think、wonder のつながりが教室の言葉を豊かにしていくと思います。

そして、言葉と表現の差異を重視するということです。

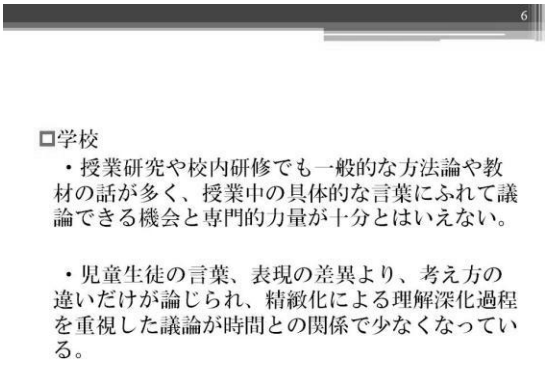

図 5

学びあう授業での言葉の力の要素

今まで自動化、熟達化の部分の処理過程が言語能力としてよく指摘されてきました（図 6）。学力の低い子ほど、自動化、熟達化の必要性を議論してきました。しかし、これからの授業、カリキュラムで大事なことは、対象や状況、他者との協働に応じ、関与しながら相互に理解を深めるための言葉をどのように培っていくのかというところです。学力の低い子ほど、自動化の処理を練習させられます。それで高次の思考としてメタ認知を育てたり、状況に応じた理解を考えることが、これからの言葉のカリキュラムの中の重要な点だと思います。

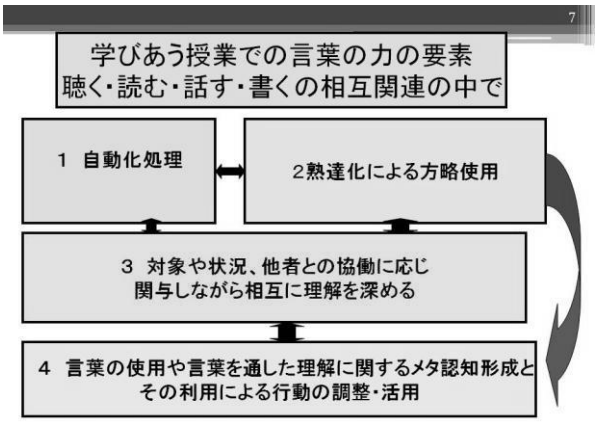

図 6

学びの習慣としての聴くことの指導

その一例として、話し方の指導と読み方の指導はよく言われるのですが、聴き方の指導は明確になされていません(図 7)。私の研究室で、修論で、英語の授業で何を聴いているかを調べた学生がいます。学力の高い子は英語を聴いていますが、学力の低い子は友達と日本語で支えられて授業に参加しているのです。自動化だけではなくて、どうやって聴いたらいいのかというルールを明確にしていません。先生がたくさんしゃべることということは、教師は聴き方のモデルではなく、話し方のモデルしか示していません。そういう教室ではなく、状況に応じてどのように聴くのか。また聴くことと、ノートや問い方などの関連のカリキュラムを作っていくことが大事です。

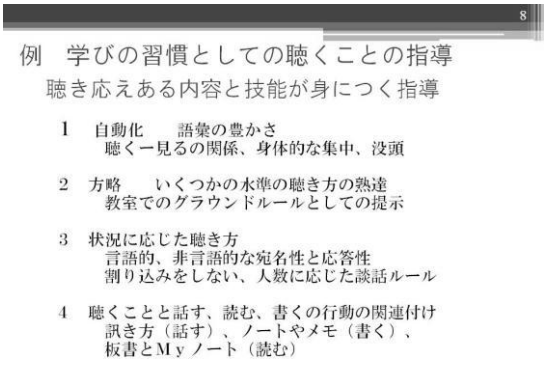

図 7

聴くことの方略

各教科の中で、例えば聴取がどのようにより高次になっていくのか、それを学校として育てていくことが大事ではないかと思います(図 8)。

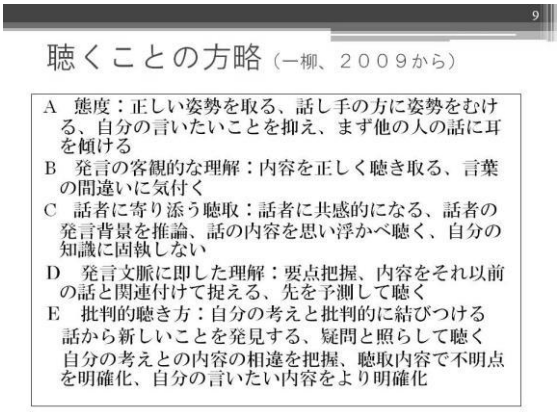

図 8

そして、学校の中で使う道具も、これ(図 9)を見ていただくと、大きな黒板ではありません。小黒板が各グループにあり、並べると一望の下に、どのように表現し、考えていくのかという、質の高い議論ができます。そのためのボードです(写真提供　福井市率立至民中学校)。

図 9

しかし、ボードだけだといつも消せます。消せないようにしながら、より精緻に、もう一度見直しをしながら表現する過程もできます(図 10)。(同上)

図 10

振り返りの視点

また、聴くことと同時に、聴いたことを振り返るという視点が大切です。例えばこれ(図 11)は小学校ですが、学校全体でカリキュラムの中に言葉を育てるため、振り返りを単に 5 段階評価するのではなく、日々書きながら、その書き方の中で育てていくようなカリキュラムを作っています(資料提供 郡山市芳山小学校)。こうした形で、もちろんナショナルカリキュラムの影響がありますが、言葉の力をスクールベースカリキュラムで考えていくことが大事です。

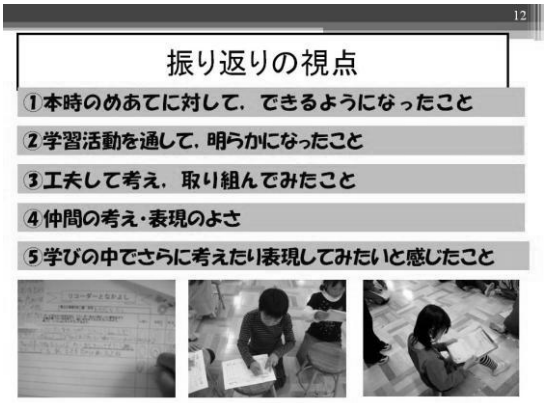

図 11

カリキュラムの連続性と学校文化の中での言葉の育成

各教科の中で、また教科書の中(メタディスコース)でどのように表現されているのか(図 12)。そして、最後に私が申し上げたいのは、帯カリキュラムで、教科だけではなくて、例えば特別活動等の 10 分間か 15 分間に、その学校の理念がよく表れます。それを学び直しの時間と考えるのか、ドリルの時間と考えるのか。例えば読書、スピーチ、つづり方といったさまざまな内容を入れた特別活動の活用により、今後言葉の育成のカリキュラムを一方で考えていくことが必要だと思います。

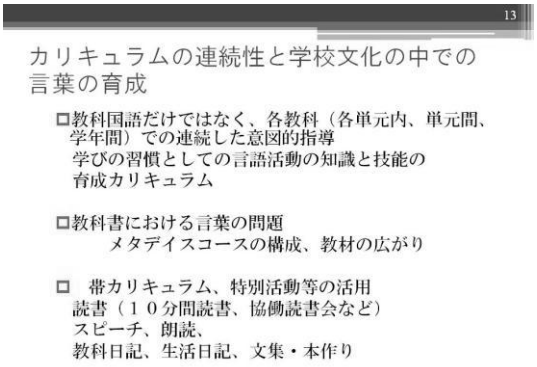

図 12

いくら方法を言っても、一番重要なことは、「生徒がどれだけ没頭できるか」なのです。これ(図 13)はアメリカのデータですが、8 年生(中 2)と 12 年生(高 3)のときの伸びです(Gurtherie,2004)。読書などに集中した経験がある子どもは、グリーンのところの伸びがいかに大きいかわかります。要するに、授業中に集中した経験の少ない子は学力の伸びが少ないのです。当たり前のことですが、子どもたちに参加してもらいながら言葉の教育をしていくというカリキュラムが重要ではないでしょうか。

図書館とメディアをめぐるカリキュラム

言葉の文化の中核には、図書館の活用が常にあると私は思っています。デューイの言葉(図 14)ですが、「自らの経験に光を与え、他人の経験から来る新しい光、世界の叡知の集積から来る新しい光を子どもに投げかける場所」としての図書館、体験を振り返る場としての言葉。しかもこの映像を見ていた

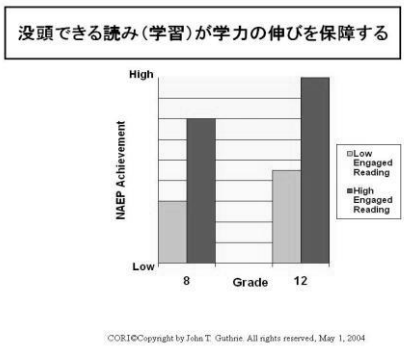

図 13

だくと、一人で読んでいません。私が勧めているのは、一人の読書だけではなく、協働で読むことで、より高次の質のものを読み解いていく。そして、そこに異質性というものを小グループの中でやっていく。例えば「どくしょ甲子園」の文化をつくろうと思っています。ブックスタートは全国の 4 割の自治体で実施され、赤ちゃんに言葉の文化をつくり出していこうとしています。こういう活動も、小学校の授業等でもそうですが、中高生が協働で読み合いながら、自分たちの言葉でキャッチコピーなどを作りながら、言葉と出合い、そのプロセスを見つめるようなことが重要ではないかと私自身は考えています。

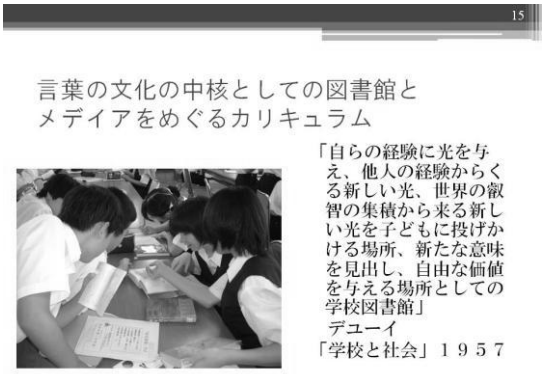

図 14

古い話ですが、言葉の教育は、大村はまの言う「ことばを育てることは　こころを育てること　人を育てること　教育そのものである」「話しことばは、そのひびきの中にこそ、その人の心を聴く」という言葉の中にあると思うのです。

この写真（図 15）を見ていただくと、これは一斉型の形式で、右側の真ん中の子はわかった瞬間の笑いですし、教室の聴き合う文化ができている学校には、机間指導などで回っているときに、子どもの目線よりも低い位置取りで対話している教師の姿が必ずあります（写真提供　郡山市立芳山小学校）。こうした形で、常に上から目線で方法やカリキュラムという問題を考えるのではなく、もう一度、子どもの言葉の中から言葉の経験を考えていく。ナショナルカリキュラムも大事ですが、言葉のカリキュラムをつくることは、学校の文化をつくり出すことだと私は思っています。どのようにつくっていったとしても、恐らくそこに学校の文化があり、そこに質の高い言葉の教育とは何かを考えるかぎがあると思います。

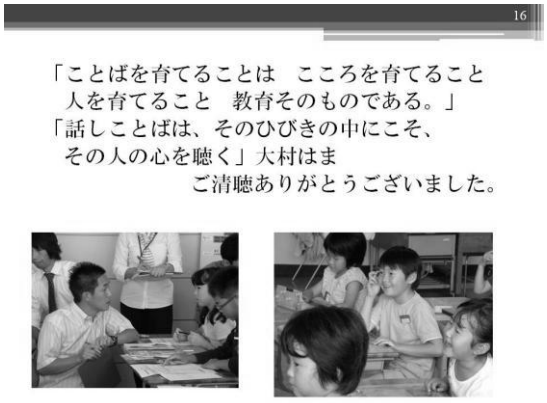

図 15